

卵膜外リパノール液注入に依る妊娠中絶法

国立岡山病院産婦人科

医 長 木 田 恵 三
 医 員 花 岡 恒 夫
 石 田 秀 雅
 竹 林 康 光

[昭和29年2月15日受稿]

妊娠中期の人工中絶は妊娠中絶の中で最も困難であつて、妊娠中絶方式の選定については種々論議されていてこの型式程多くの種類の行われているものはないと考えられる。中絶型式の選定に当つて重大な事は母体に障害を与えないことが第一条件である事は勿論である。私達も種々の方法を行つて来たが、昭和27年5月より先般藤林、今林氏により発表された「卵膜外リパノール液注入法」を行つて105例を得たので茲にその成績を発表して検討を加えたいと思う次第である。

実験方法

本法は藤林、今林氏の原法に従つてネラトソカテーテル10号を子宮壁と卵膜との間に挿入し、之に注射器を連結しカテーテル内の空気を除去した後0.1%リパノール液30c.c.を注入しカテーテルをそのまま留置しておく。陣痛が発来すれば塩規0.3gを2時間毎に3回投与している。24時間しても陣痛が発来しない場合にはカテーテルを入れ更え前回同様リパノール液30c.c.を追加注入する。私達は全症例について前述の様な方法で行つている。

実験成績

(1) 本法の成績

本法の成績を陣痛発来迄、胎児娩出迄、後産娩出迄の時間に分けて観察した。この成績を妊娠月数別に示せば第一表の通りである。又胎児娩出迄の時間について最長、最短の時間を妊娠月数別に示せば第二表の通りである。又第三表には同じく胎児娩出迄の時間を各月

別に所要時間を示している。即ち私達の成績では妊娠月数別に中絶終了迄の時間に特別に意義は認められない。唯妊娠四ヶ月では他に比して著明に早く終了している。又58例(55%)は30時間以内に、40時間以内には83例(79%)が娩出を終つている。

第1表 妊娠月数別に見た平均時間

月数	時間	症例	陣痛発来迄	胎児娩出迄	後産娩出迄
IV		21	11°28'	22°39'	22°48'
V		30	18°54'	30°42'	30°55'
VI		38	19°05'	33°22'	33°32'
VII		16	18°30'	31°01'	31°09'
平均		105	17°50'	30°07'	30°16'

第2表 各月に於ける胎児娩出迄の時間

月数	時間	症例	最短時間	最長時間	平均時間
IV		21	9°00'	34°30'	22°39'
V		30	13°10'	53°00'	30°42'
VI		38	13°50'	59°50'	33°22'
VII		16	19°20'	50°25'	31°01'

第3表 各月に於ける後産娩出迄の所要時間

月数	時間	症例	10°以下	10°~20°	20°~30°	30°~40°	40°以上
IV		21	1	8	7	5	0
V		30	0	5	11	7	7
VI		38	0	5	13	9	11
VII		16	0	2	6	4	4
計		105	1	20	37	25	22
%			1%	19%	35%	24%	21%

(2) 初、経産別の時間

105例中初産は18例で胎児娩出迄の時間は

平均 30°55' であり、経産は 87 例で 29°54' であつて特別の差異は認められない。

(3) 副作用

副作用は第4表に示す通である。発熱7例は何れも 37°5'~38°C5' ですべて一過性であつて胎児娩出後には何れも下熱して産褥伝染と考えられるものは1例もない。出血例も多量なものは1例も認められない。

第4表 副作用

副作用 月数	発熱	出血	内容除去術	微弱陣痛	計
IV	3	0	6	0	9
V	2	2	4	1	9
VI	2	1	4	1	8
VII	0	1	1	0	2
計	7	4	15	2	28

卵膜又は胎盤遺残のために内容除去術を行ったものは15例であつて IV, 9, V, 4, VI, 2 であつて妊娠4ヶ月に多発している。之は胎盤完成の程度に依り胎盤剝離の難易に関係して妊娠4ヶ月に多発しているものと考えられる。其他頸管裂傷、胎盤早期剝離等も1例もなく勿論母体死亡例も1例も認められない。又産褥経過は何れも良好である。

リパノール初回注入後24時間経過しても陣痛発来なくカテーテルを入れ更え再注入を行った例が9例あつて他は1回の注入で成功している。この他型の通りにリパノール液を注入しても子宮口よりリパノール液が流出するため止むなく本法を中止してブジー挿入法に変更したものが3例あるが、之は前述の統計よりは除外している。

(4) 他種中絶法との比較

木田は先に第10回中国四国産婦人科集談会に「アブレル」氏法について発表したが、この成績及び当科で行つたブジー挿入に依る妊娠中絶の成績と三者の成績を比較すれば第5表の通りである。アブレル氏法は原法に従つて行い 100c.c. の飽和食塩水を注入している。又ブジー挿入方法は小指大の太さのブジーを一本挿入し陣痛が発来しない場合は24時間毎

第5表 各種中絶法の比較

方法	時間 症例	陣痛発来迄	胎児娩出迄	後産娩出迄
リパノール法	105	17°50'	30°07'	30°16'
アブレル法	52	15°35'	33°04'	33°27'
ブジー法	74	19°23'	44°36'	44°47'

に入れ更えている。三者の中本法が一番早くブジー挿入方法が最も時間を要している。

考 按

本法の陣痛発来機転は多くの人が述べている様に主として注入液による卵膜剝離、カテーテルによる卵膜の機械的剝離及びカテーテル留置によるカテーテルのブジー様作用に依るものである。併し以上の実験成績により私達は前述の理由の他にリパノール液自体による何等かの作用があるのではないかと考える。即藤林、今林氏の述べる様にリパノール液の作用が卵膜剝離のみにあつてリパノール自体の作用は何等考えられないものとするれば、注入液は他のものでもよく、又注入量が多い程剝離面が大きくなつて早く娩出が終るのではないかと考えられる。併し柚木教授は生理的食塩水を同様に行つて 100~200c.c. 注入して平均47時間を要している。又菱田氏はリパノール液の注入量を 30, 40, 50c.c. と変えて行つては時間的に何等の差異を認めていない。之等の点よりすれば卵膜剝離のみに依る理由の他にリパノール液自体の子宮、胎盤又は卵膜に及ぼす何等かの作用が要因となつてゐるのではないかと考えているが、之等の点については尚今後の検討にまつものである。

結 論

卵膜外リパノール液注入法に依る妊娠中期の中絶法は特別の器具を要せず、操作簡単で娩出終了迄の時間も早くそして患者に特別の苦痛もなく認むべて障害もないので現在の段階においては最も勝れた妊娠中期の中絶方法であるとする。

本論文の要旨は第八回厚生省医務局研究発表会及び昭和28年秋中国四国九州産婦人科連合会学会に発表した。